

接続詞「また」の機能領域の広さと対称性 —「さらに」「一方」と比較して— 井伊菜穂子

従来の接続詞研究の多くは、接続詞が前後の文脈をどのような接続関係で結びつけるかに着目してきた。一方で、従来の観点だけでは明らかにできない、接続タイプの壁を越えた共通点をもつ接続詞がある。本発表では、類似の複数の事態を対称性を保ちつつ結びつける「また」を中心に、同じ添加型の「さらに」、異なる対比型の「一方」をとりあげ、接続詞が意味的に結びつける文脈の範囲である機能領域の広さと前後の対称性を実証的に分析することによって、接続タイプの壁を越えた接続詞の特徴を明らかにする。

分析対象のデータは、人文科学領域の研究論文 60 本中の本文の文頭で使用された接続詞「また」「さらに」「一方」の機能領域である。分析の結果、以下の 3 点が明らかになった。1 つ目は、段落頭で使用された方が段落内で使用されるよりも機能領域が広いこと。2 つ目は、とくに段落内で使用された場合、3 形式ともに機能領域の広さの対称性が高いこと。そして 3 つ目は、異なる接続類型に属する「また」と「一方」は量的な対称性だけでなく、文のタイプという質的な対称性も高いことである。

接続詞「また」は多くの場合、「一方」とは異なる性質をもつ接続詞として研究や教育現場で扱われている。しかし、機能領域という新しい分析観点から捉え直した結果、「また」と「一方」の間には、文のタイプの類似度の対称性が高く、とくに段落内で使用された場合は前後の文数の対称性も高いという、従来の接続タイプの壁を越えた共通点が明らかになった。

今後、他の接続詞の性質についても機能領域の面から再考し、より精緻な接続詞の分類論や前後の文脈の精緻化・数値化につなげ、作文教育や自然言語処理への応用につながる研究を目指したい。